

第1回「日本語大賞」

テーマ 「人と人をつなぐ日本語」

大学生・専門学校生・一般の部 優秀賞 受賞作品

「合唱指導で知った日本語の力」

秋田県

小西 保明

歌を歌う場合、歌詞とメロディーのどちらを優先すべきだろうか、などと考えるのは意味のないことであると今ではよく分かっているが、合唱指導を始めたばかりの私には大きな問題だった。

私が教師になって三年目に赴任した中学校では音楽担当の教師は一人だけだったのに、吹奏楽部と合唱部という音楽に関する二つの部活動があった。その結果、合唱は詩を扱うというそれだけの理由で国語教師の私が合唱部を指導することになったのである。

合唱部の活動は毎年秋に行われるNHKや民間放送局が主催する各種コンクールへの参加が主なものであった。コンクールは地区予選を経て、県、地方、そして全国大会へとつながっている。その階段を一つでも上がることが部員達の願いであり夢でもあった。

その夢を少しでも叶えてあげたい。若い私は必死で合唱指導の勉強に取り組んだ。課題曲の講習があると聞けば自費で東京まで出かけ、合唱に関する講習会が行われると知れば積極的に参加した。

その甲斐あってか三年目にはどうにか地区予選を通過できるまでになったが、とうてい県大会を競うまでにはいたらなかった。

コンクールで歌うのは生徒であっても試されるのは指導者の力量である。私の競争相手は一人の例外もなく全て音楽教師であった。

「ピアノも弾けなければ知識もない国語教師には音楽を専門とする先生方に勝つことなんて所詮無理なんだ」

私は挫折感に苛まれ、眠れぬ日々をおくっていた。だが生徒達はさらに上位の成績を目指して私の前に並び、目を輝かせながら指導を待っている。

悩みぬいた果てに、私は持っている国語の知識を歌の表現に生かすことができないだろうか、と考えるようになった。

国語には朗読という分野がある。歌だって表現方法こそ違ってはいるが歌詞の朗読と言えなくもない。その日から私の合唱指導は大きく方向を変えた。

最初に始めたのは言葉の持つ意味、すなわち語感をメロディーに乗せることであった。悲しみを含んだ語は悲しそうに、うれしい言葉は躍動感をもって表現することに努めた。

だがこのような抽象的でわかりにくい指導は中学生には無理だったのだろう。言葉のはつきりしないたどたどしい歌になっていった。

一語一語を鮮明に、しかもわかりやすく指導するには？ 私の頭はいつもそのことでいっぱいだった。そんな思いが私をテレビやラジオから流れるアナウンサーの声に注目させたのである。何度も聞き続けているうちに私は幾つかのことに気がついた。

その一つは子音の扱いである。歌の指導では明るく深い声を作るために母音の練習に時間をかける。だが鮮明な発音を作るためには子音の練習をもっと大切にすべきではないだろうか、と思ったのである。

子音には有声音や無声音さらに破裂音や摩擦音等があり、それぞれ発音の方法が違う。その違いを体を通して具体的に実行に移した。

またアナウンサーは単語や文節を一つのまとまりとしてわかりやすく伝えるために、最初の語を意識的に強く発音しているような気がした。例えば「さくら」という単語を発音する場合、最初の『さ』という音をやや強調するように、等々。

しかしこのような根気のいる地味な練習を繰り返しているうちに、私は音楽室へ向かう足が次第に重く感じられるようになってきた。生徒達だつてきつと……。

そんな時だった。音楽の先生から、

「この頃合唱部の歌が明るくなってきたのではないか？」
といううれしい言葉を頂いたのである。

だが言葉が鮮明になっても詩の意味が伝わるとは限らない。作者がこの詩で言おうとしていることが、聞いてくれる人の心に届かなければ単なる言葉の羅列にすぎないのではないか。詩の意味、作者の心を伝えるにはどうすればいいのか。私はこの大きな壁の前で再び立ちすくんでしまった。

今思えばどうしてそんなことを思いついたのか記憶にない。おそらく窮余の一策だったのだろう。私はそのヒントを、落語を聞くことによつて見つけたような気がする。

詩や文章の意図を伝えるためには、段落の意味を捉えなければならぬ。さらに段落を構成しているのは文であるから、一文一文の意味をしっかりと掴むことだった。落語を聞いた時、文が生きていると感じたのである。

文は文節からできている。文節は文を構成する要素としてそれぞれの目的を持っている。主語や述語、あるいは修飾語として。

主語と述語は離れていても気持ちの中では決して離してはいけない。修飾語は被修飾語がどれであるかを意識の中に入れて歌おう。会話や呼びかけの文節は気持ちをやや高揚させながら、等々。文節の特色をよく理解した上で文の全体像を表現することに努めた。

次は段落である。段落は文から作られているから、内容を理解するためには文と文との関わりを把握しなければならない。

これではまるで国語の学習ではないか。これが合唱指導と言えるだろうか。こんなことに大切な練習時間を費やしているのだろうか、そんなジレンマを支えてくれたのは私の指導に不満も言わずついてきてくれた生徒達の努力と忍耐だった。

ところで私は練習の最後に必ずその日の歌を録音することにしてきた。ある夜、練習に疲れたのか神経が昂ぶって眠れなかったので、その日の録音を聞いてみた。

歌が進むにつれて私の気持ちは高揚していった。以前より言葉がよくわかるようになったとは思っていたが、詩の心が、作者の思いが表現されているかどうかについては全く自信がなかったのだ。それがどうだろう。今、しっかりと伝わってくるではないか。私は胸が熱くなり涙が滲んできた。

本当だろうか。自分のひとりよがりではないのか。静かな夜の中で感傷におぼれているのではないか。果たして朝になれば……今まで何度もこんなことがあったから。自問自答の中で私はなかなか寝つけなかった。

翌日からの練習はこの朗読をいかにして与えられた曲の速さ、指定されている強弱、さらに歯切れの良いリズムに乗せることができるかということであった。

そして知ったのである。曲というものは速さも強弱も、そして細かいリズムまで歌詞の意味をよく生かすように作られているということ。至極当然のことであったが、それに気づくのに半年を費やした。だが決してその歳月が無駄ではなかったことを今ではよくわかっている。

その年全国大会で三位になり生徒達は歓喜の叫びを上げた。翌々年にはそれまで無名であった田舎の学校が十七年間無敵を誇っていた県庁所在地の伝統校を破り、私達は最優秀となり、涙を流したのである。

「言葉がよくわかります。しかも聞く人の心に強く訴えかけてくる合唱です」とおっしゃって下さった審査員の言葉は今も忘れない。

それから十余年、常に地方大会の上位入賞校に名を連ねることができるようになった。

その合唱指導も職場事情から二十八年間で終止符を打ったが、国語教師であった私が音楽の世界でいくらかの成果を上げることができたとすれば、それは緻密な日本語の構成と、そこから生まれる人の心に強く訴えかける力を信じ続けたことにあつたと思つてゐる。

定年退職から十年、七十歳の今も地域のお母さん方と合唱を楽しむと共に、時には近くの学校へでかけ生徒と歌う喜びを共有できる幸せを感じてゐる。